

まだまだできることは多い

・・・12時間で伸びる、受験会場で伸びる

まだまだできることは多い

だんだん「後がない」という緊張感で、ピリピリしている人、いままでに発揮したことのないようなエネルギーを発揮してやろうと意気込んでいる人、いろいろあろうと思いますが、共通テストまであと「50日」はけっこうな時間です。よく芸能人が漢字検定にチャレンジしたりしますが、そのたぐいで、数学者の秋山仁先生がアーチェリーの国体チャンピオンにセンター数学に取り組ませるといふ企画がありました。結果、分数の通分計算さえまなななかつたチャンピオンが12時間取り組んだところ、共通テスト6割に達したとのことです。12時間でできることはある。ということは50日間でできることはもっとあります。「案ずるより産むが易し。とにかく本気になってみる。悩む前に、今、手にした本を本気になって征服することから始めよ。そこから君の未来はきっと開けていく。」秋山仁先生はこう結んで、その企画の成功を喜んだとのことです。

今思わしくない結果に悩んでいる人も、頑張り続ける自分を信じてとにかく手を動かしてください。現役生は本当にここから伸びます。受験当日まで伸びます。勉強は裏切りません。「例えばフィギアスケートの選手だったら、日頃血の滲むような努力をしてきても、本番で一回転倒したら、大幅な減点になってしまいますが、みなさんが仮に勘違いして失点してもトータルでは大幅な減点にはなりません。」という意味です。体に気をつけてみんなで頑張りましょう。

試験場でこそ・・・受験会場で伸びる

試験場に入る前、なすべきことはなした。あとは天命を待つのみ、そうした風情の人がいる。あれはよくない。受験の勉強は、これから始まるのだ。

試験場に入る前が半分、入ってからが半分、これからが頭の使いどきだ。試験場に入った時点では、まだ合否は半分しか、きまっていない。

いっそ、少々準備不足であっても、この欠陥をなんとか試験場で挽回しなくっちゃと意気こんでいるぐらいのほうが、準備万端ととのったと悟りすましてより、ずっとよい。

そして、試験時間中に頭を使ったと、受験することで自分が賢くなったぐらいの手ごたえがあると、合格しちゃうものだ。勉強したのは試験の始まる前だけ、試験時間中はそれを吐きだして消耗しただけで、なんとなく頭がしぼんじやうのようなのより、ずっとよい。

ぼくの知っている学生で、受験準備のほうは思うにまかせなかったのだが、試験時間中にぐんと張りきったので、なんとなく手ごたえを感じたというのがいる。それでその手ごたえに自信がついちゃって、試験の終わった日に下宿を探しに行き契約までしちゃったのだそうだ。こんな強気な奴には、運命の女神もあきれちゃったらしく、そいつはそのまま合格してしまった。

試験場というのは、一種の鉄火場であって、強気なほうがよい。試験場に入る前の学力のうち、何パーセントを出せるかが勝負だ。なかには超能力かなにかで、百二十パーセントぐらい出すのがある、という説まである。もしそれが本当なら、六十パーセントしか出せない受験生の半分の学力で間に合うことになる。

試験場に入る前以上に、入ってからの試験期間中に頭を使おう。受験はまだこれから勝負だ。

左の文は数学者森毅先生の「ノンビリ受験心得」からの抜粋です。そしてわれわれに、次の2つのことを教えてくれているように思います。

1つ目に、よく高校野球などで「このチームは甲子園にきてから伸びましたね」といわれますが、本当に甲子園というとても集中して野球に取り組む場を体験することで、いままで練習してきたことが再構築されて力になっていくことはあり得ることです。これは勉強でも同じことです。模試の早期自己採点を勧めています。模試を受けている時間というのは、いやでも静かですし、他のことを考えている余裕がなく、とても集中して頭が働いている貴重な時間です。したがって、記憶のはっきりしているうちに自己採点してそのときの集中していた頭の状態をよみがえらせることは非常に深い意味があります。言い換えれば模試の時間に賢くなっているのです。将棋のプロが一局終わったあとに、いまの試合をすべて復元して53手目の飛車成りが早すぎましたねなどと講評できるのも集中していたからこそできる技なのです。そのような脳の活性化状態の最たるものが受験会場なのです。家で模試の過去問をやっているときも、そして当日の受験会場でも、実は想像以上に伸びているということです。

2つ目に、やはり勉強というものは事前に覚えたことを本番で吐き出すものではないということです。いままで学んだことをその場で再構築して組み立てて、問題解決していく力、こういう力が求められています。よく試験場でヒラメいたなどといいますが、これも活性化した脳が、以前に学んだ知識のどの部分をどう再構築したらよいかを導いてくれただけのこと、以前に学んだ知識がなかったら絶対にヒラメくなんてことは起こりません。脳の活性化で再構築しやすい脳になっているか否かだけのことなのです。

募集要項・赤本等について

1. 募集要項

募集要項を手に入れないと出願できませんし、正確な出願期間や注意点も確認できません。例えば、同じ学部を2回受ける場合、書類は1つでよい大学あるいは、受験料も2倍ではない大学も多いし、事前に登録した教科の得点を2倍する特定教科重視型を設けているような私大もあり、出願の仕方はどうするのかなど、要項を見ないとわからないことも多いです。国公立の場合、第1併願パターン、第2併願パターンと4つ手に入れておかないと、共通テスト後では思うように届かなくてハラハラしたり直接保護者が高い交通費を払ってもらいに行かれたりということが毎年起こっています。特に、国公立の場合は共通テストが終わって自己採点が1月20日(月)、受験産業からカルテが返ってくるのが23日(木)、そして27日(月)から2月5日(水)の間に、前中後期とも出願(必着のところも多いので、その前日までに)しなければなりません。準備しておかなければとても慌ただしくなるのです。

2. 赤本

受験校をおよそ固めたら、赤本を手に入れておきましょう。赤本は季節ものだから売り切れたらもう手に入りません。使い方は自分の判断で決めればよいですが、この時期であれば1年分だけは、まず解いてみましょう。そうすることによって、解答時間や問題量のイメージがつかめるとともに、「社会問題を題材とした英作文が毎年出ている」とか「数学Ⅲの出題割合が異常に高い」とか「100字以内で要約せよ」という設問が何個もある」など、傾向がわかり、学習計画を立てる際に活かすことができるからです。

3. 共通テスト利用私大

共通テストと連動して、共通テスト利用私大がありますが、多くの大学では独自のペーパーテストをしないため、定員確保の調節に使いやすく、結果的に募集要項に書いてある数字以上にこの方法での合格者を出す大学も多いです。実際に合格したら入学したい者にとってはチャンスです。1つ合格が決まれば精神的に落ち着いて以降の戦いができます。ただし、出願メ切が共通テスト前の大学も結構あるので国公立受験校と並行して考え、「調査書・推薦書交付書」を書き早めに発行依頼をしておこう。